COM 通信　　第１２１号
発行日：２０２３年５月２６日
編集・発行　：COM 事務局
〒399-0021　松本市寿豊丘 609-30

会報 ウェルCOM!

（コムハウス運動を支援する市民の会）

コロナ禍の向こうへ

風薫る５月の青空、残雪の白、里山の新緑、それぞれの色がひときわ映える季節となりました。一方で、早くも真夏日になる日もあり気温差の激しい日が続いておりますが、会員のみなさま、お元気でお過ごしでしょうか。

さて、５月８日より、国のコロナ対策が見直され、地域の医療機関、学校、職場、そして福祉施設でも、コロナの対応が変わってきました。一方で、新型コロナウィルス自体が消失したわけではありませんので、毎日の体調確認、手洗い、消毒、必要に応じたマスク着用などの基本的な感染対策は、今後も続ける必要があります。

ふり返ると、2020 年２月より、いわゆる「コロナ禍」となってから３年４か月が経ちました。

世界規模の未知なる感染症の出現は、わたしたちに強い緊張感と不安感をもたらし、かつ、実際の生活を大きく制約しました。またこの３年間で、わたしたちは実際に感染がひろがった経験を、何度もしてきました。

時として、出口の見えない闇のなかにいるような心持ちになったことも、あったのではないでしょうか。

同時に、コロナ禍のなかで、わたしたちは気づかされたこともありました。

それは第一に、いつもと変わらない日常こそが大切であることでした。あたりまえのことが、あたりまえにできなくなった日々だったからこそ、「今日」という日の大切さを、再認識することができたのだと思います。

第二に、社会の支えの弱さを浮き彫りにしたことでした。たとえば、地域のコロナ対応の司令塔となった保健所は、これまで国が統廃合してきたために対応が追いつかず、保健所業務は大変逼迫しました。

また、コロナ対応の最前線となった地域の医療現場の過酷さは、くり返し報道されてきましたし、日々のくらしを支える介護施設・障がい福祉事業所のコロナ対策の厳しさも、わたしたちは強く実感してきました。

この背景には、社会保障費の縮減を強く進めてきた国の政策があります。

このようにコロナ禍で浮き彫りになったことは、日頃から「いのちとくらしを支える現場を、“ギリギリ“の状態にしてはいけない」ということでした。社会基盤の弱さ、もろさに向き合う必要性を、コロナ禍は強く示したと思います。

今、わたしたちは、ようやくコロナ禍の向こうへ歩みはじめました。ここ３年以上の大きな制約と不安のなかで見つけた大切な気づきを、これからに活かしていきたいと思います。このことが、だれもが安心してくらせる街づくりにつながるからです。そしてあらためて、感染対策の最前線で尽力された方々に、深い感謝を表します。

会員のみなさま、これから暑くなる時季となります。くれぐれも、ご自愛ください。